

福岡県における「弁当の日」認知度調査

太 宰 潮

【目 次】

1. はじめに
2. 「弁当の日」に関する福岡県の取り組みについて
3. 調査概要と基礎集計
 - 3-1. 調査概要
 - 3-2. 基礎集計
4. 分析結果
 - 4-1. 西日本新聞記事との関連
 - 4-2. 料理や食に対する意識と弁当の日評価イメージとの関連
 - 4-3. 食材購入時の考慮点と認知度
 - 4-4. 食材購入先と認知度
 - 4-5. 「弁当の日」の応援をする人の特徴
5. まとめ
 - 参考文献
 - 補足・参考資料

1. はじめに

人にとって「食」は非常に重要であると共に、課題として認識されていることも多い。

平成19年度の農水省の委託事業として行われた調査¹⁾によると、「衣・食・住・知・遊・その他」から「あなたの生活で重要なもの」を上位3つまで選択した結果、最も重要なものは「食（食事・食生活）」が60%を締め、圧倒

1) 平成19年度食と農への理解を基礎とする新たなライフスタイルのあり方の確立に関する調査」(n=2060) <http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/lifestyle/>

的に重要視されていることが示されている。我が国も食や「食育」に関する様々な施策を実施しており、平成17年に食育基本法が施行され、平成23年から27年にかけては、第2次食育推進基本計画が実行中である。食または食育は国内政策や国民にとって、重要な課題のひとつであると言える。

その一方でいわゆる「食の外部化」が進行し、料理を作らない・作れない生活者や消費者は増え続けており、家庭の団欒は減少の一途を辿っている。家計調査などによる調査でも、外食・中食・内食では内食だけが縮小傾向²⁾であり、それに合わせて生鮮食品の消費も縮小傾向³⁾である。家庭の団欒が減少する裏で「孤食」（個食、小食などとも言われる）も食育基本計画で解決すべき課題として提示されている⁴⁾。

これらの食に対する課題に対するひとつの取り組み、「食育」の中のひとつとして、現在我が国に「弁当の日」という取り組みが広まりつつある。「弁当の日」とは、2001年に香川県からはじまった、小・中学校において主に行われる活動で、子供が保護者などの手を借りることなく、買い出しから調理、盛り付け、片付けまでを子供が自分だけで行って弁当を作る取り組みである。高校・大学なども合わせると2016年1月時点で1800を超える学校が実践⁵⁾をしており、14年間で急速に広まってきているほか、宮崎県や福岡県などをはじめとした県単位、もしくは東広島市や狭山市など、市区町村単位で推進や実践に取り組むところも出てきている。

福岡県は2014年3月から「弁当の日」を推進する様々な活動を行っているが、活動を推進する上では、その認知度がどれくらいなのか、どのような人

2) 経済産業省「家計の外食・中食の動向」

<http://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/bunseki/pdf/h14/h4a1209j059.pdf>

3) 農林水産省「平成21年度食料・農業・農村白書」

http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h21/

4) 内閣府「食育推進基本計画参考資料集」

www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/pdf/siryo1-1.pdf

5) ひろがれ弁当の日ホームページ実践校 <http://bentounohi.kids.cocan.jp/zissen.html>

に支持されているのか、支持層・認知していない層の把握やその理由などといった基礎的な状況を知ることが求められる。しかし、福岡県規模における「弁当の日」についての認知に関する調査は本論執筆時点まで行われていない。

以上の現状を踏まえた本論の目的は、福岡県内における「弁当の日」の認知度を調べることで、どのような人がその活動を理解し、後押しするような傾向にあるのかを確認することである。

2. 「弁当の日」に関する福岡県の取り組みについて

「弁当の日」に関する起源や全国における広まりの詳細の説明は、創始者でもある竹下和男氏の文献（竹下2003, 2006）などに詳しいが、本論は福岡県における「弁当の日」の取り組みに焦点があるため、本章では福岡県内における取組みについて概要説明を行う。まず『月刊 JA』の2009年4月号から連載された「ひろがれ！弁当の日」からの引用を中心に、福岡県の取り組みを振り返り、続いて県の発表資料等から福岡県の普及状況等を確認する。

2003年12月、九州を中心に70万部を発行する西日本新聞社が、食の問題などを取り上げる連載「食卓の向こう側」コーナーを1面でスタートさせ、食の実態やその問題などを取り上げた。このコーナーが注目を集め、中心である西日本新聞社の佐藤弘記者、コーナーに寄稿した助産師の内田美智子氏らが講演活動を頻繁に行うようになり、シリーズをまとめたブックレットは2009年時点で50万部を突破した⁶⁾。この連載が、福岡で食に関する問題意識を広める上で非常に重要な役割を果たしたと言える。

竹下和男氏は2003年度に農林水産省の「地域に根ざした食育コンクール2003」で農林水産大臣賞を受賞するなど、その認知度を高めていく。そのよ

6) 『月刊 JA』2009年4月号

うな中、2005年の夏に西日本新聞の当コーナーの記者らが竹下和男氏を訪問⁷⁾、翌2006年3月には「食卓の向こう側」コーナーにて「第8部・食育その力」(全16回)がスタートし、「弁当の日」を取り上げていくこととなる。朝刊1面でスタート、1面に3面も使うロングバージョンと見開き特集1回という力の入れようであったが、これが食の問題に続いて「弁当の日」という活動を広く福岡県に知らしめることとなった。取材班や竹下氏などのメンバーで年200回に及ぶ講演会やシンポジウムも開催するなどの草の根的な活動も行ったほか、北九州市の西南女学院短期大学の池田博子教授が学生と共に「弁当の日」を行うといった広がりを見せつつあった⁸⁾。

2006年2月、福岡市内の公立学校で初めて「弁当の日」を行ったのは、当時福岡市立・下山門小学校に勤務していた稲益義宏教諭である⁹⁾。当初稲益教諭は3年生の担任であったが、試験的に声をかけて市内の文化会館への見学の際に「弁当の日」を実施し、翌年春には既に95%の生徒が、完全に自分で作るかしくは親子で弁当を作ってきたという。その4年生は年5回の弁当の日を実施し、その取り組みは下山門小全校へ広がった。2008年には稲益教諭は市立愛宕小学校へ異動したが、そこでも同様にして全校規模での「弁当の日」を実践することとなる¹⁰⁾。

2006年10月には九州大学で「食育ワークショップ—食卓の向こう側」が行われ、九州大学でも「弁当の日」がスタート。2007年4月には学生主催による九州大学で第2回目のワークショップが開かれ、九州各地から10大学・80人の大学生が参加し、その後もワークショップは半年に1回のペースで

7) 『月刊 JA』 2009年5月号

8) 『月刊 JA』 2009年9月号

9) 西日本新聞 2013年8月28日朝刊。尚、生徒が自分で料理を作る取り組み自体は、それまでも広く様々な形で行われていた(例えば夏休みに宿題として家庭で料理を作る、などの形)。あくまで「弁当の日」として福岡県内で初めて行ったのが稲益教諭である、ということ付記しておく。

10) 『月刊 JA』 2009年10月号

計5回行われ、最大で150人の参加者を集めた¹¹⁾。2008年には福岡大学でも「弁当の日」がはじまり、2009年2月、2015年10月には県内小売店の店頭作りなどによる応援活動が行われている。2009年の取り組みについては太宰(2011)を、福岡大学の学生によって行われた2015年10月の取り組みについては、2016年1月に福岡県庁で行われた、「ふくおか弁当の日 優良事例報告会」での発表内容などを参照されたい。

このように、小中学校の現場では2006年から広まりを見せてきた「弁当の日」であるが、福岡県という行政による近年の取り組みに目を移すと、2014年3月に、県が平成26年度から3年間で「子どもが作る「弁当の日」実践日本一」を目指すと宣言している¹²⁾。日本一とは「実践校数」日本一という意味であり、平成26年度に新たに「子どもが取り組む『ふくおか弁当の日』の実践校拡大に要する経費」として2,269,000円を計上し¹³⁾、講師派遣事業などの取り組みをスタートさせた。

本論を執筆した2016年前半ではほぼ2年が経過したが、2015年度に県が独自に行った調査では、小・中学校合わせた県内の「弁当の日」実践校数は、平成25年度で303校、平成26年度は368校、平成27年度は429校（うち小学校285校、中学校144校）となっており、確実にその数が増加をしている。しかし実践校数トップである埼玉県の560校超の数には及んではない¹⁴⁾。また福岡県内の国公立小学校は平成27年時点で750、国公立中学校は340である¹⁵⁾ことを踏まえると、その普及はまだ半分にも届いておらず、これからの普及の余地が多く残されていると言える。従ってその更なる普及を考えた場合は、その支持者・応援者、もしくは反対する者などの分析を行っておくべきであろう。

11) 『月刊 JA』 2009年11月号

12) 西日本新聞 2014年4月23日朝刊

13) 福岡県「平成26年度当初予算の編成概要」

http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/85633_17129782_misc.pdf

14) 2016年1月12日に福岡県庁で行われた「平成27年度 子どもが作る『ふくおか弁当の日』優良事例報告会」発表資料より

15) 福岡県平成27年度教育便覧より

3. 調査概要と基礎集計

3-1. 調査概要

本論で紹介する認知度調査はマクロミル社の調査サービス「Questant」を利用したものであり、福岡県在住の30～40代女性331人（30代159人、40代172人）から回答を取得した。調査期間は2015年11月1日から11月4日の3日間である。当該性別年代に絞った理由は、当サービスで割付が性別と10歳刻みの年代で可能であったことから、小中学生の子供がおり、「弁当の日」を認知している可能性が高く、また食品の調理や購入などの行動を行いやすいという観点において、セグメントを選定したためである。結果に大きく影響するであろう、年代ごとの子供有無については、30代159人のうち64人、40代では172人のうち94人が、「既婚で子供有」となっている。全サンプル中では既婚者が205人（61.9%）、うち子供がいるのは158人（47.7%）となっており、4割弱が未婚者、半数以上は子供がいない回答者となっていることを踏まえて分析結果を把握する必要がある。尚本論で調査対象を絞った意図は、「女性が家庭に入らなくてはならない」などとした価値観を押し付けることには無いことを断っておく。

調査で取得をした項目は下記の通りとなっている。

- ① 料理頻度（Q1）
- ② 料理の際に生鮮食品，基礎調味料，料理のための道具を用いる頻度（Q2）
- ③ 西日本新聞における食に関する記事の閲読経験（Q3）
- ④ 「弁当の日」認知度（経験含む）（Q4）
- ⑤ 「弁当の日」を説明した上でのイメージ・評価取得（10項目）（Q5）
- ⑥ 「弁当の日」についての所感（FA）（Q6）
- ⑦ 料理や食に対する意識（10項目）（Q7）

- ⑧ 食材購入先（Q8）
- ⑨ 食材購入時重視点（Q9）
- ⑩ 婚姻状況と子供の有無（Q10）

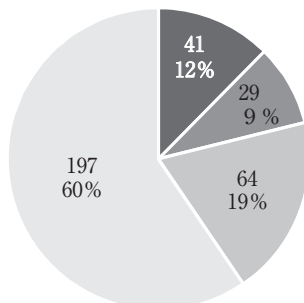
中心となる項目は「弁当の日」の認知についてであるが、基本的な考えは「弁当の日」の認知と料理の頻度、生鮮食材を用いて料理をしていること、料理や食に対する意識などが相関し、食材購入先や購入時の重視点とも関連が見られることを想定して設問を設計した。

続く章で、各項目の基礎集計や簡易的な分析結果を示してゆく。分析には IBM SPSS Modeler 17.0 を用いている。

3-2. 基礎集計

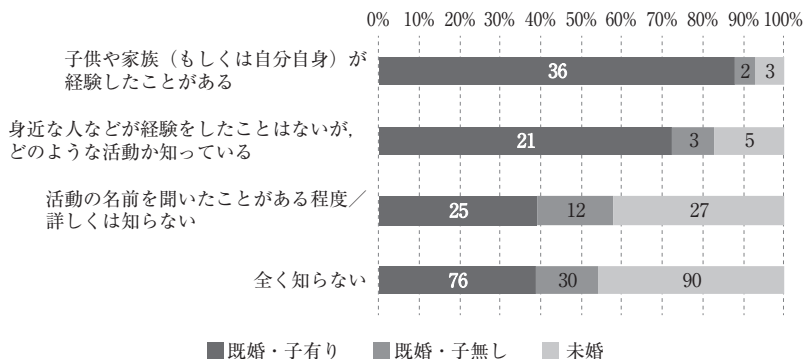
まず「弁当の日」の認知についてである。Q4の集計結果は図表1の通りとなっている。

Q4 主に小・中学校で行われている「弁当の日」という食育活動を知っていますか？



- 子供や家族（もしくは自分自身）が経験したことがある
- 身近な人などが経験をしたことはないが、どのような活動か知っている
- 活動の名前を聞いたことがある程度／詳しくは知らない
- 全く知らない

図表1 弁当の日認知度



図表2 婚姻状況・子供有無と「弁当の日」認知度（棒グラフ内数字は人数：以下同様）

既に活動を経験済みであるのが41人（12%）、全く知らないとした人が6割、程度の差は別に認知をしていると判断できるのは4割となっており、全国でも活動が盛んと言われる福岡県でも、実践・認知共にその普及の程度はまだまだ初期段階であることがわかる。さらに今回は、一般的に料理のニーズが高く、「弁当の日」を認知しやすい層に対する調査であることを踏まえると、県民全体ではさらにこの認知度が下がることが当然想定される。

また、常識的な考えとしては、「弁当の日」は主に子供の活動であることから、子供の有無とその認知度は大きく関連をすると考えられる。図表2はQ10の婚姻状況・子供有無と「弁当の日」認知度のクロス集計結果（ただしQ10で「その他」と回答した1名を除外してグラフを作成）である。図表2からは、その関連が大きいことが確認できる（ $\chi^2=43.436$, $df=6$, $p<0.001$ ）。「名前を聞いたことがある程度」と「知らない」という層に限っては、逆に婚姻や子供有無がほとんど関係していないことがわかる。

「弁当の日」を経験済みの41人のうち、36人が既婚で子供がいる層であるが、未婚者や子供がいない回答者も経験をしている理由は、設問で「家族」としていること、また「弁当の日」は小中学校以外に、前章で紹介をしたよ

Q5 「弁当の日」を説明した上でのイメージ・評価取得

■ 全くそう思わない ■ ややそう思わない ■ どちらでもない ■ ややそう思う ■ 非常にそう思う

とてもよい活動だ	19	15	72	155	70
この活動で、子供との会話・家庭での会話が増えると思う	18	24	81	141	67
子供の成長につながると思う	14	24	64	129	100
今後も活動が広がって、続けて欲しい	21	15	101	125	69
日々の自分のしていることが子供に伝わると思う	18	21	89	129	74
子供が食材や家族に感謝をすることにつながると思う	17	17	84	138	75
面倒であると思う	23	53	132	100	23
強制すべきでない	17	41	138	101	34
教育的効果はあまりないと思う	6	1	110	125	23
もし自分の子供がやる時は、全てを任せてみたい	17	31	127	111	45

図表3 Q5「弁当の日」を説明した上でのイメージ・評価取得

うな大人が参加するシンポジウムなどのイベントでも行われるためなどと推察される。図示はしないが、年代との関連については、「弁当の日」を経験済みであるのは30代が15人、40代は26人、「身近な人などが経験をしたことはないが、どのような活動か知っている」という人も30代が10人、40代は19人となっており、40代のほうが認知度は高い結果となっているが、やはり子供が小学校高学年になるときに母親は40代になっているケースが多いことが影響をしていると考えられる。普及をさせたい福岡県などの主体としては、こうした細かい年齢セグメントなども把握・考慮をすべきだろう。

次に図表3では、Q5の10個の問いで尋ねた、「弁当の日」を説明した上でのイメージ・評価取得の結果を示す。「弁当の日」の説明を踏まえた設問としては、

『※「弁当の日」とは、主に小・中学校の生徒が、『自分の力だけで』弁当を作る活動です。「弁当の日」についてのイメージや印象を、それぞれ「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5段階でお答え下さい。「弁当の日」が良くわからない方も、上の説明から感じた率直なイ

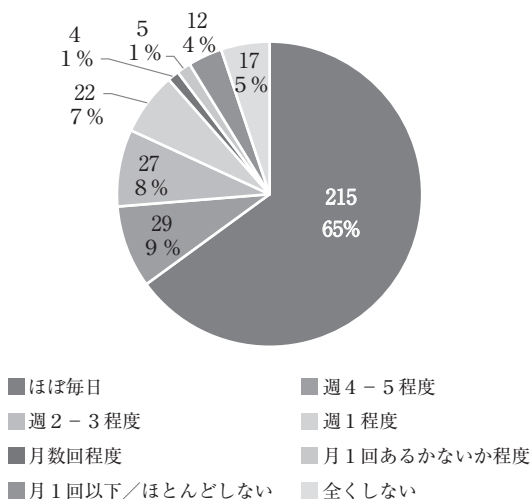
メージ・印象をお教え下さい。』

という文言となっており、続いて図表2に掲示をしてある各項目を尋ねている。

集計結果では、「とてもよい活動だ」という設問をはじめ、「子供の成長につながる」、「子供が食材や家族に感謝をすることにつながると思う」という設問にも6割～7割程度の回答者が好ましい回答（「非常にそう思う」や「ややそう思う」）をしており、また「教育効果はあまりないと思う」という設問にも、多数派の人が「教育効果がある」側の回答をしていることから、経験・認知に関わらず、全体として「弁当の日」に対するイメージや評価は好ましいものと言える。「全くそう思わない」「ややそう思わない」というネガティブな回答をした層はどの質問でも1割前後と言えるが、「面倒であると思う」という設問には123人と37%ほどの回答者がネガティブな反応をしている点は、良いことであるが面倒、という生活者の本音が現れていると言えよう。「強制すべきでない」という設問に対して「非常にそう思う」と「ややそう思う」と回答をした人が135人と40%を超える比率となっており、好ましい評価やイメージがある中で、否定的もしくは反対派とも取れる声もある程度存在することを認識すべきである。

注目すべきは、好ましい6～7割の回答をした人は、「面倒」などのネガティブな回答をしていないわけではない、と言う点である。例えば「とてもよい活動だ」に「非常にそう思う」と回答をした70人のうち、「面倒であると思う」に「非常にそう思う」と答えているのが5人、「ややそう思う」と回答をした人は20人、合わせて25人にのぼる。「とてもよい活動だ」に対して「非常にそう思う」と「ややそう思う」までを含めた225人中であれば、そのうちの90人が、「面倒であると思う」という問いに「非常にそう思う」もしくは「ややそう思う」と答えている。「強制すべきでない」もほぼ同じ回答となる。つまり、「弁当の日」に対して好ましいイメージや評価を抱い

Q1 あなたが料理をする頻度を教えてください



図表4 Q1料理の頻度

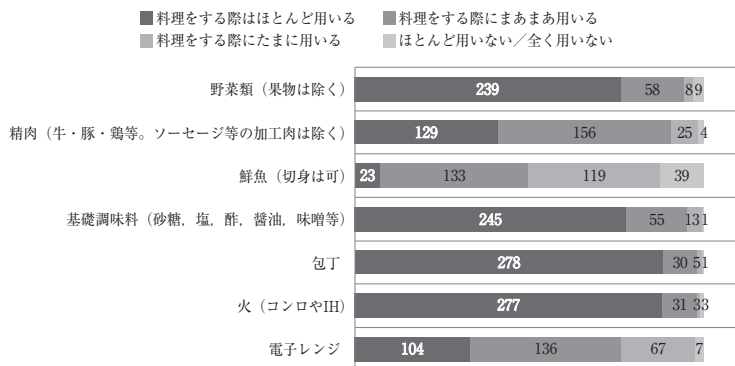
ている反面で、「面倒」といった相反する想いが交錯している様子が窺える。

続いて、今回の調査対象者の料理の様子を概観しておく。

図表4はQ1で取得した、今回の調査対象者の料理頻度である。65%の回答者が「ほぼ毎日」と回答をしており、「週4-5程度」を含めると4分の3程度が高頻度で料理をしていると言える。料理をする頻度が多いと、一般的な食育活動、また子供が料理をする「弁当の日」にも好ましい態度を示すと考えられ、図表3に示したイメージ・評価項目が全般的に好ましかったことと関係をしているものと考えられる。一方、料理の頻度が少ない層も少数派であるが確認され、こうした群との認知や評価との関連を確認することが、より活動を広げるひとつの鍵となるとも言えよう。

図表5はQ2で取得した、食材と料理のための道具を用いる頻度の集計結果である。「弁当の日」ではレトルト・インスタント・冷凍食品などではな

Q2 各食材と料理道具を用いる頻度



図表5 Q2 各食材と料理道具を用いる頻度

く、基本的に子供が自ら生鮮食品を中心とした食材を選んで調理することが前提となっているため、家庭における青果・精肉・鮮魚が用いられる頻度や、包丁などの器具を使う様子を取得した。

図表5からは、野菜は当然ながらほとんどの家庭で頻繁に用いられており、包丁や火についてもほとんどの家庭で頻繁に使われている様子がわかったが、精肉・鮮魚を食材で用いる頻度が高くない様子が窺える。特に鮮魚については「たまに用いる」と「ほとんど/全く用いない」でおよそ半分の回答比率となっており、「魚離れ」が進んでいる様子が窺える。

事前に想定はされたが、料理の頻度は基本的には年齢と共にあがる。30代前半では「ほぼ毎日」料理をする人が60%ほど（76人中46人）であったのに対し、40代後半では「ほぼ毎日」の人が76%ほど（68人中52人）となっている。また料理の頻度と子供の有無も当然強く関係をしており、「既婚・子有り」であると料理を「ほぼ毎日」行っているのは90%ほど（158人中142人）であるのに対し、「既婚・子無し」では70%ほど（47人中33人）、「未婚」になると32%ほど（125人中40人）となる。料理の頻度とQ4の「弁当の日」認

知度を掛け合わせると、「（「弁当の日」を）経験済み」の41人中38人が「ほぼ毎日」料理を作っており、「（「弁当の日」は）全く知らない」と回答した197人中は117人が「ほぼ毎日」料理を作っていた。この結果は、「料理の頻度が多いほど認知度が高い」と読めるかもしれないが、年をとり、且つ子供がいるほうが「弁当の日」の認知は当然高まることを踏まえた解釈が必要である。

本章の最後に、Q6で取得した、「弁当の日」に対する自由記述から実際に「弁当の日」を経験したと考えられる回答者の記述（原文ママ）を紹介しておく。Q6では「「弁当の日」の取り組みについて、お考え、ご感想を詳しく教えて下さい。「弁当の日」が良くわからない方も、「弁当の日」とは、主に小・中学校の生徒が、『自分の力だけで』弁当を作る活動、という説明から感じた率直なお考え、ご感想をお教えてください。」という文言で自由記述回答を求めている。

- 学校で仕事をしています。弁当（おにぎり）の日は自分で作らず、保護者に作ってもらう生徒も多く、取り組みとして浸透しているかはわかりませんが、自分で作った生徒は必ず、日ごろの親の苦勞に対するありがたみや、食の大切さなど、感謝の気持ちを述べます。今後も是非、この活動を続けて、自分で作っている生徒だけにでも、教育的効果が上がればいいと思います。
- いつも食べている好物を、自分で作りたいと思えるきっかけになっているので、良いと思える。簡単でないことを身を持って体験できたようで、米とぎだけは毎日してくれるようになった。
- とてもいい取り組みだと思う。以前スーパーのチラシで小中学生が作ったりお弁当の写真が載っているのを見たことがあるが、こんなに立派なもの（キャラ弁や彩りが豊かなもの）が作れるのかと感心した覚えが

ある。自分の子供が生まれたときに子供の成長を感じるイベントとして、是非やらせたいと思いました。

- とても良い事だと思う。昨年娘がお弁当の日で自分でメニューを考えて、実際作ったのは母親である私だが、今年は不得意ながらも自分で作るうとしているので、食について考えるいい機会だと思う。
- 小学6年生の娘が、今年2回ほどお弁当の日を体験しました。全部を調理するまでにはいかないが、材料の調達から一緒に考えました。早起きをしてお弁当を作る大変さはとてもわかったようです。卒業までに後1回お弁当の日がありますが、それは全部自分でやらせようと思います。
- 我が家は男の子でしたので、ほとんどを母親任せでした。うちはキッチンも狭く、朝の忙しい時間に2人でキッチンを使うというのは実際難しいのもあり、邪魔で面倒でしょうがないというのが正直な気持ちでした。正直共働きの家庭などは大変だっただろうな、と思います。食育とは言いますが、どの程度役に立っているのか微妙ですし、強制されなくても、毎晩の食事の時間に自然にそういうものは身につくものだと思います。それをさせていれば教育していると思い込んでいる企画者の自己満足です。

賛成意見、反対意見が入り混じる記述となっているが、経験者の是非に関わらず、それ以外にも注目した回答の本文は、論の末尾に掲載しているので参照されたい。単語の出現状況をごく一部であるが紹介すると、ポジティブなニュアンスと共に用いられているものについては、例えば「感謝」という単語は24回出現しており、その内容は親、家族、もしくは食材を作ってくれている人等への感謝として述べられている。他に「自立」という単語は10回出現しており、「自立心が芽生える」、「自立の一步という感じ」などの記述がなされている。

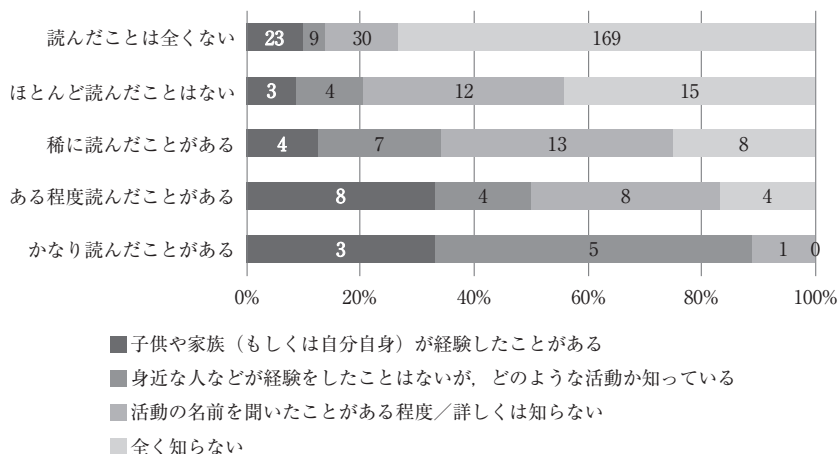
反対のニュアンスとして用いられている語句としては、先に Q5におけるネガティブな反応に関連する語句として、「強制」が13回（「強制すべきでない」など）、「面倒」が12回（「仕事を持つ人が多い今の時代には面倒」「子供の成長、経験を積ませることは良いと思うが、実際にはかなり面倒」など）、「忙しい」が13回（「朝の忙しい時間にするのは難しい」、「子供は勉強で忙しい」など）出現している。反対意見の中には家庭の個別事情を憂慮する声（「できない家庭があることもわかった上で、やったほうがいい。」「共働きでなかなか子供がお弁当を作る時に見守れない親御さんもいると思う。」など）も散見された。Q5の反応からは総じてポジティブな結果が得られたものの、こうして自由記述をするとネガティブなことに焦点が当たる点については、この活動が「規範」的視点に基づいていたり、学校の現場ではなく家庭にその活動の現場があることなどを反映したものではないかと考えられる。

4. 分析結果

本章では、主に「弁当の日」認知度（Q4）を中心に、認知度が高い人を分析してゆく。まず西日本新聞記事との関連を確認し、続いて、料理や食に対する意識と、「弁当の日」のイメージや評価の関係を因子分析やクラスター分析を用いて確認する。さらに、食材購入時の考慮点や食材購入先と認知度との関連を確認した後、「弁当の日」を応援する人の特徴を主に決定木分析を用いてまとめてゆく。

4-1. 西日本新聞記事との関連

前述のとおり、「弁当の日」は西日本新聞の「食卓の向こう側」コーナーをきっかけに広がっていった経緯があるため、記事の閲読と「弁当の日」認知度の関連を改めて図表6で確認した。記事閲読と年代は特に関係がない



図表6 西日本新聞コーナー閲読経験と認知度

(5歳刻みの年代と記事閲読： $\chi^2=11.166$, $df=12$, $p=0.515$) ことを確認しつつ図表6の結果を見ると、読者の人数が少なくはなるものの、やはりコーナーを読む程度と認知度が大きく関係していることがわかる ($\chi^2=97.348$, $df=12$, $p<0.001$)。認知度 (Q4) を目的変数、他の全変数を説明変数として決定木分析 (C5.0, 情報量基準による分割) を行っても、第一分岐としてこの「食卓の向こう側」コーナーの閲読 (Q3) が抽出され、相関の強さが確認できる。

メディアによる継続的な露出が認知に影響を与えることは当然であるとも言えるが、現在全国で広がりを見せている「弁当の日」を特定地域にさらに広めたり、活動の理解を深めたりしていく上では、地域における露出があるかどうかのポイントであると言えるだろう。

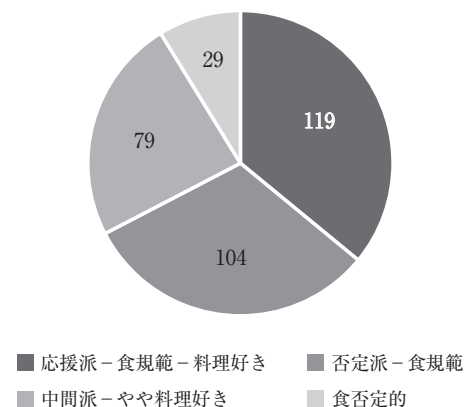
4-2. 料理や食に対する意識と弁当の日評価イメージとの関連

本節では、Q5の「弁当の日」のイメージと、Q7の料理や食行動についての意識項目をもとに因子分析とクラスター分析を行った結果を説明する。まずQ5で示した「弁当の日」のイメージや評価の10項目に対して因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行うと，ポジティブな評価項目7（Q5S7）～項目9（Q5S9）以外とネガティブな評価項目7（Q5S7）～項目9（Q5S9）の2因子が抽出された。ネガティブな項目とは「面倒であると思う，強制すべきでない，教育的効果はあまりないと思う」の3つである。

一方Q7の料理や食に対する意識の9項目の因子分析結果では同様に2つの因子が抽出され，第1因子で因子負荷量が高かった項目は，順に「食材は，できれば国産や地場産品を選びたい」，「添加物，原材料が気になるほうだ」，「インスタント食品を食べ続けることに抵抗がある」，「外食が続くことに抵抗がある」という4項目であるため，第1因子を「食材こだわり・外食インスタント敬遠因子」と名付けた。

第2因子は同じく因子負荷量の高い順から「自分で手を下して料理をすることが好きだ」，「自分が作ったものを他の人に食べてもらえることが嬉しい」，「自分の子供に料理を教えたいと思う」，「小さい頃から料理をする機会は多かったと思う」となっていることから，第2因子を「料理好き因子」と名付けた。Q7のうち「家庭の団欒を大事にしたい」という項目は，第1，第2因子双方の因子負荷量が高くなっているため，因子の解釈に考慮していない。

因子分析はQ5，Q7ともに主因子法で行い，バリマックス回転をかけており，因子抽出後の共通性は，Q5の1項目（「もし自分の子供がやる時は，全てを任せてみたい」）が0.371，Q7の1項目（「小さい頃から料理をする機会は多かったと思う」）だけが0.305となっている他は，全て0.4を超えている。累積寄与率はQ5の2因子で67.765%，Q7の2因子で52.150%となっている。

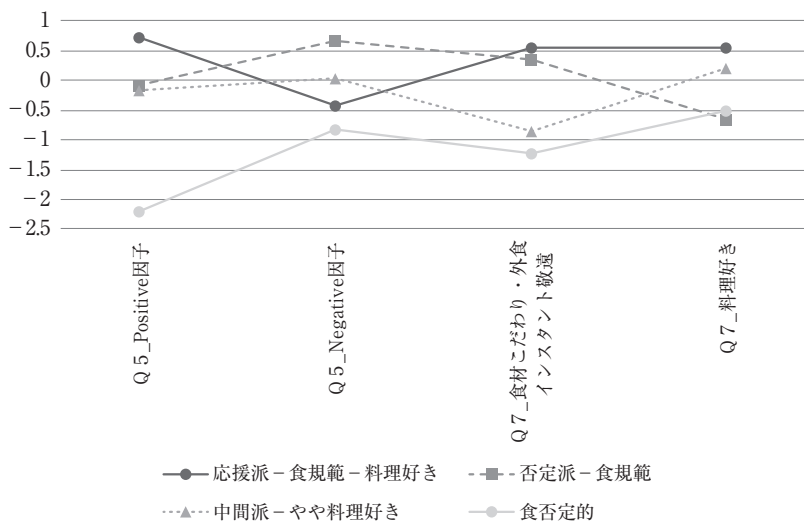


図表7 クラスタ構成比（グラフ内数字は人数）

回転後の因子行列の出力については、本論の末尾に提示をしているので参照されたい。

次に、抽出された Q5と Q7から抽出された4つの因子得点を説明変数としてクラスタ分析（K-means 法）を行い、4つの群にサンプルを区分し、「弁当の日」に対するポジティブさ・ネガティブさと、食に対する意識がどのようにまとまるかを探索した。4つの群の構成比率は図表7、各因子得点の平均値は図表8となっている。クラスタ名は、Q5の第1因子のポジティブ因子が高いと「応援派」、第2因子のネガティブ因子が高いと「否定派」、そのどちらでもない「中間派」とした。また Q7は第1因子の「食材こだわり・外食インスタント敬遠因子」が高いと「食規範」とし、第2因子の「料理好き」はそのままクラスタ名に使った。

図表8は4つのクラスタごとの平均因子得点を示している。末尾参考資料には、因子得点に用いる以前の Q5と Q7の各項目の、クラスタごとの平均値も掲載しているので参照されたい。図表8からは、最も多い119人の「応援派-食規範-料理好き」である人は、外食やインスタントなどに抵抗があ



図表8 各クラスターの平均因子得点

り、料理好きな人でもあることがわかり、食にまつわる行動や態度と、「弁当の日」への評価が強く関連している様子が窺える。好ましい評価・イメージである群が最大となっていることは、「弁当の日」を推進する福岡県としては好材料であろう。

次に「弁当の日」に対して「面倒である」「強制すべきでない」といった項目が高い、否定的である（ネガティブ因子が高い）「否定派-食規範」群は、104人となった。その群はQ7の「料理好き因子」が最も低い反面で、原材料にこだわったり、外食やインスタントを敬遠したりする面（食に対して規範的な面）も併せ持っている。この群に対しては「面倒さ」や「学校で何故子供に行わせるか」といった教育面の点に関する理解を進めると、応援派に回る可能性が高まるものと考えられる。

79人の「中間派-やや料理好き」群は、Q5の「弁当の日」への意識は

(「どちらでもない」が多く) ポジティブでもネガティブでもないが、原材料へのこだわりや外食・インスタントを敬遠するということはなく、しかしその反面で料理に対してはやや好ましい態度を示している。この群については、食そのものへの関心からアプローチすることが、応援派に変わってもらうポイントではないかと考えられる。

全ての平均因子得点が低く、食に対して否定的な「食否定派」群が29人となっているが、彼らは「弁当の日」に対する評価も、食規範に関する回答も、当然料理が好きかどうかに関連する回答も、その程度が著しく低い。

各群とQ4の「弁当の日」認知度を掛け合わせると、「応援派」である群はやはり経験者や活動を知っている割合が多い結果が得られたが、興味深い点としては「食否定派」が「弁当の日」を知らないわけではなく、経験者や活動内容を知っている人の率が4つの群で最も高いという点である。具体的には、「食否定派」の29人中11人が「(弁当の日を) 全く知らない」と回答しているが、これは4つの群の中では「全く知らない」が最も低い比率であること、29人中4人が「弁当の日」を経験したことがあり、5人がどのような活動か知っている、と回答しており、その比率は「応援派」よりも高い。従って、「食否定派」群は「弁当の日」に接したことがあり、その概要を知った上で、食自体に否定的な態度を取っているケースが多い群となる。この群に対する理解を進めることは、困難となることが想定される。

各群のデモグラフィックのうち、婚姻状況と子供の有無については、「否定派-食規範」群と「中間派-やや料理好き」の2つの群において未婚者と既婚で子供がいない人が多数派であるが、「応援派」と「食否定的」の2群は、「既婚・子あり」のほうが多数派となる特徴がある。教育の現場に子供がいるかどうかでその家庭の食生活はある程度変わることが考えられるため、評価やイメージもそれに伴って変わってくるのは当然とも言えるだろう。

年代について特徴的な点は、「食否定的」や「否定派-食規範」である群

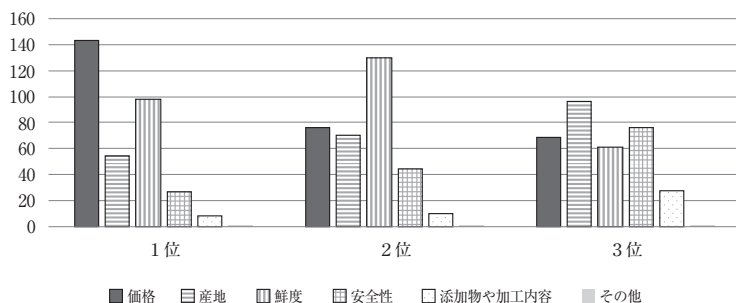
の年齢が高めであることだ。前者の40代比率は約55%（29人中16人）、後者の同比率は63.4%（104人中66人）となっているが、「応援派」の40代比率は49.5%、「中間派」のそれは39.2%となっており、基本的には年齢の高さと、「弁当の日」に対するネガティブな群との関係がみられるという結果になった。

4-3. 食材購入時の考慮点と認知度

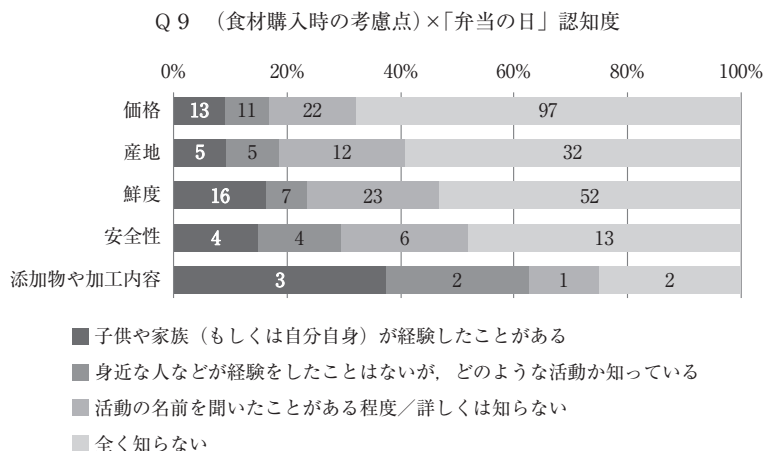
Q9では「食材を購入する時に考慮するポイント」を1位から3位まで尋ねているが、図表9がその単純集計結果である。まずは価格が最重要視され、次いで重視される項目は「鮮度」であること、続いて「産地」などが考慮されることが見てとれる。

続いて、「弁当の日」の認知の程度と食材購入時の考慮点は図表10の通りである（図表10は「その他」を除いて表示）。認知の程度と、考慮点が「価格」以外の項目が相関関係になっていることが見てとれるが、「安全性」と「添加物や加工内容」については、そもそも「既婚・子有り」の回答者が多く回答をしており、「弁当の日」の認知よりも、子供を有するということが因果であると推察される。しかし「価格」「産地」「鮮度」の回答者について

Q9 食材を購入する時に考慮するポイント（1位～3位まで）



図表9 食材購入時の考慮点



図表10 食材購入時の考慮点(第一位)と「弁当の日」認知度

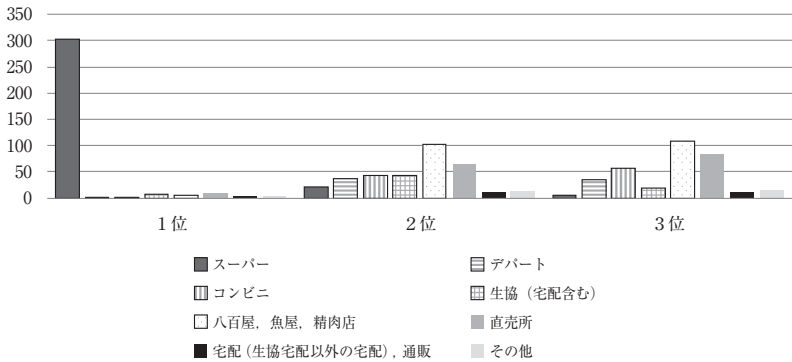
は、「既婚・子有り」の比率はほぼ変わらない(むしろ「価格⇒産地⇒鮮度」の順で既婚・子有りの比率は減少する)ため、「弁当の日」認知度と「産地」「鮮度」の考慮についてはその関係がある可能性があるが、その関係度合いは図表10からは、強いものとは言えない程度となっている。

4-4. 食材購入先と認知度

図表11は、Q8で尋ねた、購入頻度の多い食材購入先の集計結果である。具体的な質問項目は「料理に用いる食材を買うときは、どこで購入しますか? 購入頻度が多い順に、1位から3位まで、3つを選択して下さい。(食材を購入する機会がない方は、購入する機会があると想定してお答えください。)」であり、選択肢は図表11に示すようにその他を含む8つであった。

大多数を占めるのはやはりスーパーマーケットであり、2位、3位となると「八百屋・魚屋・精肉店」、「直売所」などと続くことがわかる。直売所がある程度選択されることについては、東京・大阪などの大都市圏とは異なる

Q 8 食材購入先（1位～3位まで）



図表11 食材購入先

ことが推察される。図示はないが、大多数（303人）が選択したスーパーでは、その中の認知度比率もほぼ全体のものと大差がない結果となっている。2位で回答をした購入先に Q4の「弁当の日」認知度を重ねると、特徴的な差が見られたのは「コンビニ」であり、食材購入先の2位にコンビニを選択した42人のうち、「弁当の日」を「子供や家族（もしくは自分自身）が経験したことがある」という人はひとりもないという結果となった。尚、その42人のうち「既婚・子有り」は13人、「既婚・子無し」が5人、「未婚」が24人となっており、子供がいる比率が全体よりも明らかに少なく、また未婚者の比率も明らかに多い。その42人のうち、「弁当の日」の評価項目のうちで「とても良い活動だ」と回答した人は、購入先に「宅配（生協宅配以外の宅配）、通販」を選んだ10人の次に、「非常にそう思う」と回答した比率が低い結果となった。

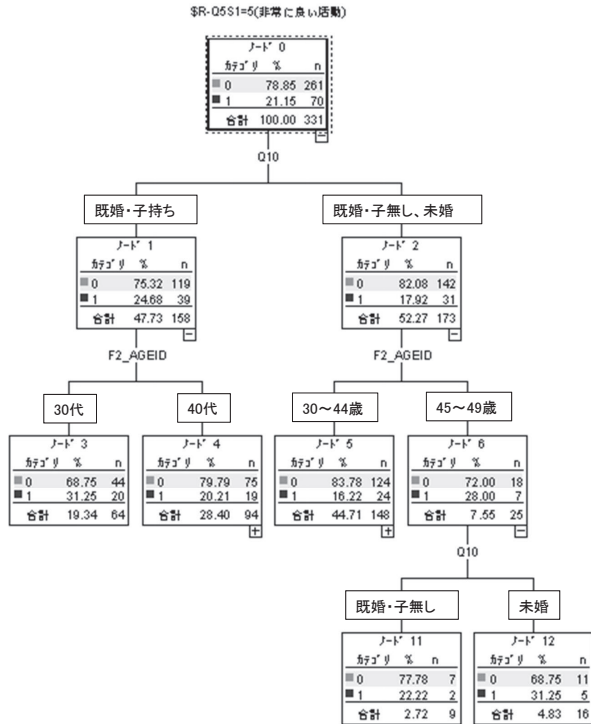
婚姻や子供の有無による影響は既述の通りであるが、独身時代は外食やコンビニの食品で済ませていたけれども、子供ができることで料理をするようになり、購入先がスーパーに変わるケースは容易に想像できる。選択人数が

十分でないチャネルについて議論をすることは難しいが、一般的にはコンビニの食材は高く、またすぐに食べられる加工食品の比率が非常に高い。仮にそうした先で食材・食品を購入する機会が多いのであれば、手を下して自ら作るということにネガティブなイメージを持つことも想定される。現在はコンビニで生鮮食品が購入できる箇所も多く、またコンビニで食材を購入しているからといって即時に何か悪い影響があるというわけでは当然ないが、購入先の選択と「弁当の日」の評価や認知などが関係をしている可能性はないとは言えないだろう。

4-5. 「弁当の日」の応援をする人の特徴

3-2節で Q5の10個の評価・イメージ項目についての分析を行ったが、本章ではそのうちの（弁当の日は）「とても良い活動だと思う」という項目に焦点を当て、そこに「非常にそう思う」と回答をした70人（全体の21.15%）に焦点を当てた分析結果を示していく。

まず、基礎的なデモグラフィックとの関連を確認するために、年代と Q10の婚姻状況と子供の有無の2変数を元に決定木分析（CART）を行った。図表12の分岐左側に着目を見ると、まずは Q10の回答が「既婚・子持ち」であると、「とても良い活動だと思う」と回答した比率が158人中39人（24.68%）と増加するが、これは3-2節でも議論をしたことと同様であり、予想された結果と言えるだろう。さらに「既婚・子持ち」であるセグメントのうちで、30代である64人になると、「弁当の日」が「とても良い活動だと思う」と回答をする率がさらにあがる（64人中20人：31.25%）。これは年齢的に子供が小学生以下などである確率も高いため、妥当な結果であるとも言えるだろう。ただし、この64人中、弁当の日を「子供や家族（もしくは自分自身）が経験したことがある」としている率は11人（17.19%）に過ぎない。経験の是非とは別に、主体となる子供がいると考えられるセグメントの評価が好ましい



図表12 決定木分析 1

ことがまず考えられる。

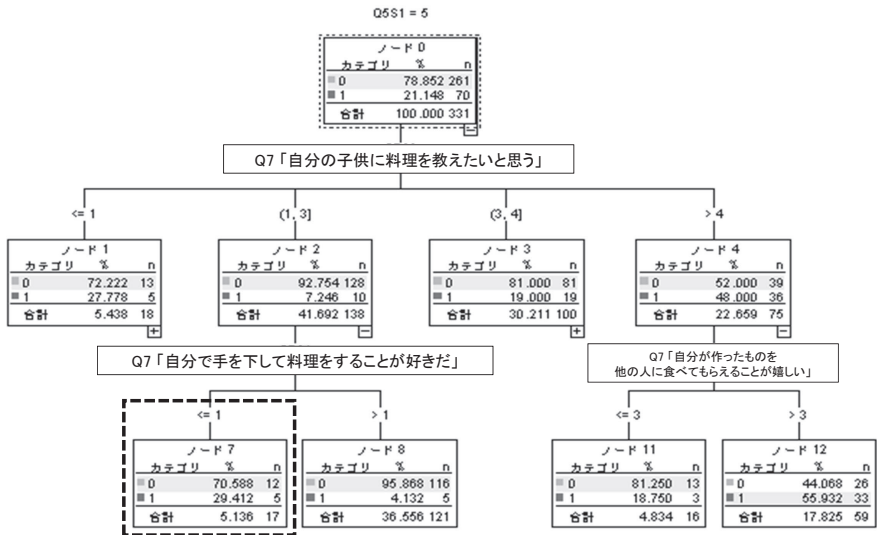
子供がないセグメントの側については、図表12の分岐右側から確認できるのは、逆に子供と接点の少ない層の評価の高さである。まず、既婚・子無し or 未婚である173人中、「弁当の日」が「非常に良い活動」と評価したのは31人（17.92%）しかいないのだが、続く分岐では、年代が45歳～49歳というセグメントになると、逆に「非常に良い活動だ」と回答した人が増える結果となった。ただし比率が28%と多くても、人数は25人中7人と少ないため、当然この結果をそのまま解釈するのは注意を要するが、その25人の中で

も、未婚であると、より「弁当の日」への評価が高い人が多くなっている（未婚者16人中5人）という結果が得られた。サンプル数が少ないため信頼性に疑問は残るものの、必ずしも子供がいたり、子供と接する機会が多いセグメントの評価だけが高いわけではない、ということは、抑えておくべき事実であろう。

次に、変数自体が強く相関する Q5, それから値が偏っている Q8を除く全変数を説明変数, 上記70人を「1」としたダミー変数を目的変数として決定木分析 (CHAID) を行ったところ, Q7の「料理や食行動に対する意識」についての項目が非常に多く抽出される結果となった。(図表13を参照)

例えば Q7の項目 9 番目 (Q7S9), 「自分の子供に料理を教えたいと思う」という問いについては, 「5」 (=非常にそう思う) と回答をした75人中だと 36人 (48%) が, 「弁当の日」についての評価に対して, 「とても良い活動だ」に高い評価を付けている。なおその36人中, 33人が Q7の7項目め (Q7S7), 「自分が作ったものを他の人に食べてもらえることが嬉しい」という問いに 4かまたは5を回答しており, そもそも子供に対して料理を教えたい人, また他者へ食事を作ることの喜びを知っている人が抽出される結果となった。

こうした意識が非常に関係している結果は納得いくものでもあるが, 逆を言えば, 「自分の子供に料理を教えたいと思う」に, 「全くそう思わない」, 「ややそう思わない」, 「どちらでもない」と, 積極的でない回答をした人が, 331人中156人と半数近くも存在している事実が, 現在の家庭における料理の伝承が行われていないこと, 親子で料理を作る機会が減っていることを示しているのではないかと考えられる。太宰 (2012) でも, 料理は結婚後にインターネットなどをみて覚えた, という人が多いことが示されている他, 岩村 (2005) が母親40人のインタビューを紹介する中で「母親たちは口を揃えたように『私は娘に料理を教えなかった』と言うのである。娘が結婚するまで



図表13 決定木分析2

に料理を教えたという人は40人中たった1人しかいない」と述べていることを踏まえても、料理を自らの子に教えるという機会は減っていることは確実だろう。しかし、「料理を教えたいと思う」人はある程度存在しており（「非常にそう思う」と回答した人は23%いる）、その人達による「弁当の日」の評価が高いという事実を、確認しておくべきではないかと考えられる。

図示はないがその他に、深い階層の結果として「外食が続くことに抵抗がある」と回答をした人との関連が強いこと、「食材は、できれば国産や地場産品を選びたい」と回答をした人との関連が強いことなどが確認できている。興味深い点として、図表13に点線で示している箇所、Q7の9項目目（Q7S9）、「自分の子供に料理を教えたいと思う」という問いに「2」（＝ややそう思わない）と回答をした138人のうち、Q7の1項目目（Q7S1）、「自分で手を下して料理をすることが好きだ」という問いに「1」（＝全くそう思わない）と

回答をした群は、17人中5人（29.412%）が「弁当の日」の評価が高いという結果が出たことである。人数が少ないことを当然踏まえてはならないが、料理をあまり子供に教えることに積極的ではなく、自らが手を下すことが好きでもない群に、「弁当の日」の評価の高い人が若干名でもいた、ということであり、一般的なイメージとは相反する数字と解釈できる。親の立場として自分の立場は別としても、子供には規範的なことができるようになってほしい、といった深層心理があるのではないかと推察される。

5. ま と め

以上、本論では福岡県在住で、「弁当の日」をより認知しているであろう30-40代女性というセグメントに対して、認知の程度や評価・イメージ、料理や食に関する行動との関連分析を行った。結果の中から注目すべき結果を改めて、下記5つにまとめた。

- ① 「弁当の日」を既に活動を経験済みであるのが1割強、程度の差は別に認知をしていると判断できるのは4割程度である。実践・認知共にその普及の程度はまだまだ初期段階。経験者・認知をしている人は子供の年齢が関係するが、4代が多い。（図表1、図表2）
- ② 「弁当の日」に対しては6割～7割程度の回答者が好ましいイメージ・評価の回答をしている。しかしその反面で、「面倒」、「強制すべきでない」といった好ましくない回答をする人も4割前後存在する。好ましい回答をした人の中にも、「面倒」といった好ましくない側と考えられる回答をした人は多く、規範的な活動に対して、ポジティブ・ネガティブな想いが交錯する様子が確認できた。（3-2節、図表3）

- ③ 西日本新聞「食卓の向こう側」コーナーを読む程度と認知度が非常に大きく関係している。（4-1節，図表6）
- ④ 「弁当の日」に対する評価やイメージと料理に対する意識に対して因子分析とクラスター分析を行い、「弁当の日」に対してポジティブな評価をする群，否定的である群，中間的である群，食そのものに全てネガティブな反応をしている群などを区分した。「弁当の日」に対するポジティブな評価については，想定はされたものの，料理が好きなことや外食やインスタントを敬遠することとの関係が確認できた。（4-2節，図表7，図表8）
- ⑤ 「料理を教えたいと思う」人はある程度存在をしており，その人達による「弁当の日」の評価が高い。（図表13）

本論の限界としては，まずは被験者が「30代，40代の女性で福岡県在住」というセグメントに限定をされている点である。身近なセグメントとはいえ，この群の評価がイコール世の中の「弁当の日」の評価，とは当然ならない。真にその評価やイメージを把握するためには，広い年代，より広いエリア，より人数の多いの調査を行うことが望ましい。また，福岡県における普及を目指すのであれば，具体的な施策改善案までを提案すべきであるが，集計と分析の結果提示と解釈，またデータから述べられる範疇の提言のみにとまっている点も大きな課題である。

論の発展としては，「料理が好きではないが弁当の日については高評価」である一方で，「面倒」や「強制すべきでない」といった“相反する評価”をしている現象，その群について，心理学などの知見を元に，賛成派になることを促せるかどうかを調べることである。物事の規範に関わることには付きまとうことが多い問題であると同時に，食以外の規範的と考えられている事柄を広めるという意味を考えても，世の中をより良い方向に持って行く際

に非常な発展的課題であると言えるだろう。

また認知度については、宮崎県や東広島市など自治体単位で「弁当の日」を行っている地域との比較を行うことが考えられる。福岡県は自発的に取り組みが広がっているが「推進」段階であり、県や市などの単位で行うことが決まっているわけではない。地域差の比較をすることで、住民による施策の評価を共有することができ、これから広くこの活動を行うところの参考とすることができるだろう。

本論が、これから福岡県、それから日本全国に「弁当の日」が広がってゆくにあって、ひとつの基礎的な資料となれば幸いである。

参考文献

- ・太宰潮（2011）「『弁当の日』と小売店～能動的に地域とコミュニケーションする店舗～」『季刊マーケティングジャーナル』30(4), pp.30-42.
- ・太宰潮（2012）「幸福度と料理行動に関する基礎データ」、『福岡大学 商学論叢』, 56(4), pp.429-447.
- ・太宰潮（2013）「『弁当の日』で地域とつながる小売・メーカー・生産者 —子供たちのためにマーケティングができること」、『日本マーケティング学会ワーキングペーパー』, 1(7), pp.119-128.
- ・岩村暢子（2005）『〈現代家族〉の誕生 幻想的家族論の死』, 勁草書房.
- ・竹下和男（2003）『「弁当の日」がやってきた —子供・親・地域が育つ香川・滝宮小の「食育」実践記シリーズ子どもの時間③』, 自然食品通信社.
- ・竹下和男（2006）『台所に立つ子どもたち “弁当の日” からはじまる「くらしの時間」 —香川・国分寺中学校の食育 シリーズ子どもの時間④』, 自然食通信社.

補足・参考資料

〈因子分析結果：Q5 因子行列〉

回転後の因子行列 a

	因子	
	1	2
Q5S1 とてもよい活動だ	.912	-.081
Q5S3 子供の成長につながると思う	.905	-.016
Q5S4 今後も活動が広がって、続いて欲しい	.900	-.171
Q5S5 日々の自分のしていることが子供に伝わると思う	.896	-.024
Q5S2 この活動で、子供との会話・家庭での会話が増えると思う	.872	-.075
Q5S6 子供が食材や家族に感謝をすることにつながると思う	.847	.021
Q5S10 もし自分の子供がやる時は、全てを任せてみたい	.606	-.054
Q5S8 強制すべきでない	.002	.794
Q5S7 面倒であると思う	.079	.700
Q5S9 教育的効果はあまりないと思う	-.358	.605

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 3 回の反復で回転が収束しました。

〈因子分析結果：Q7 因子行列〉

回転後の因子行列 a

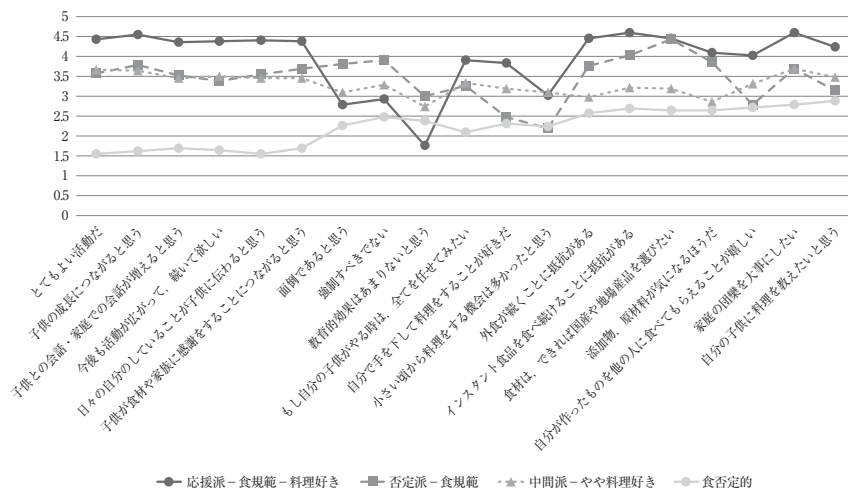
	因子	
	1	2
Q7S5 食材は、できれば国産や地場産品を選びたい	.766	.064
Q7S6 添加物、原材料が気になるほうだ	.766	.127
Q7S4 インスタント食品を食べ続けることに抵抗がある	.670	.290
Q7S3 外食が続くことに抵抗がある	.620	.299
Q7S1 自分で手を下して料理をすることが好きだ	.204	.766
Q7S7 自分が作ったものを他の人に食べてもらえることが嬉しい	.281	.709
Q7S9 自分の子供に料理を教えたいと思う	.308	.635
Q7S2 小さい頃から料理をする機会は多かったと思う	-.020	.552
Q7S8 家庭の団樂を大事にしたい	.434	.541

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 3 回の反復で回転が収束しました。

〈Q5・Q7 から構成したクラスターごとの各項目の回答平均値〉



〈Q6 「弁当の日」についての自由記述より〉（※原文ママ）

（賛成派と考えられる意見）

- 子供が自分の力だけで料理をすることで、食べ物を感謝しながら食べることに繋がり、良い食育になると思います。食材を作った人への感謝、料理をしてくれた人への感謝を合わせて、親が伝えていくことも大切だと思います。
- いいと思う。食事に興味を持つのも、作るのも、想像を豊かにする。
- 初めて具体的な内容を知ったのですが、将来に向けての練習になるので、とても良い活動だと思う。最近では結婚しない人も増え、男の子にとっても良いのではと。
- 食や料理、調理に関しての知識を得る機会であるのみならず、一口で食べていたものが、生産者、流通業者、販売者、その料理をつくるひとのたくさんの「手」にかかっていることを実感する良いきっかけになると思います。また、命をいただいているということにより感じる工夫を可能な限り（魚をさばくなど）するのも良いと思います。基本的には、楽しく学んでいただきたいけれど、日本のみならず、豊かな国を中心に飽食のうらに何トンもの無駄にされる食材（食べ残しなど）の問題があることなども学習要素としてあるとよいなと思います。

（反対派と考えられる意見）

- 受験生にも強要。時期も悪い。試験前に実施するのは、やめてほしい。朝の忙しい時間に、しかも早起きして作るのは、つらい。日頃から疲れている子供を時間いっぱい寝かせたい。自分の力だけで作れるはずがない。結局、母親の負担だ。
- 食育等はとても大切な教育だとは思いますが、それぞれの成長の程度があるので、強制的に決めてするのはよくないと思う。それに、共働きでなかなか子供がお弁当を作る時に見守れない親御さんもいると思う。
- 弁当を作れない保護者もいるし弁当は不衛生なので、弁当を作って持参するべきという考え方を強めるイベントに反対する
- 片親の子や、忙しい共働きの家庭にとっては迷惑だけです。